

中 国 滞 在 記

福 原 隆 善

日中国交が回復して十年になり、友好関係もいよいよ本格的になってきた。仏教界でも積極的に参画し、とくに浄土宗では早くから友好を深め、研究交流ができるまでに進展した。今回、日中友好浄土宗協会から研究員派遣ということで、二名が中国へ赴くことになった。中国浄土教の遺跡や文献の調査と研究を中心テーマとして、少しでも活動がスムーズに運べるように研究計画書を事前に提出して、手配がたをお願いしておいた。この研究交流が成就するまでには多くの方がたの支えがあった。計画を運んでいくためには、現地の方がたの多大なご尽力もあり、一朝一夕で成就されたものではないことを改めて認識させられる。

諸々の思いの交錯する中で、三月一日に大阪から北京入りをし、中国仏教協会の方がたのお出迎えを受けた。会長の趙樸初先生のご配慮により、研究生活をするに充分な環境づくりをしていただき、宿舎は快適なホテルが用意された。研究面においても、中国仏教協会研究部の重鎮である林子青先生が、われわれの指導のために、二十四時間体制でついていたなどの配慮を受けた。林先生は七十歳をこえられており、『現代仏学』などに多

くの論文を発表されるなど、輝やかしい研究歴をもっておられ、三十年ほど前には日本に來られたこともあり、広く中国・日本の仏教に詳しい先生である。日本から出ている最近の仏教書や研究雑誌などもかなり克明に読んでおられ、われわれはいろいろな面で指導を受けることになった。こうして北京を皮切りに太原・西安・洛陽を巡り、再び北京へもどる四十五日間の研究生活に入った。中国留学といっても、旅行を少し長くしたようなことであり、この報告も日程を追った形で印象を綴ってみた。

浄土教関係の寺院や文献を中心に研究することになっているので、あまり観光的なところは避けた。しかしその土地の有名な寺院はまわる機会も与えられたので、できるだけ訪問することにした。北京では社会科学学院の世界宗教研究所の仏教関係の先生がたとの会見の場が与えられた。ここでは国政に基いた研究がなされているようである。このほか寺院ではラマ教寺院の雍和宮や大鐘寺を訪問できたのは思いがけないことであったが、肝心の北京図書館は、最初は館内を案内していただいただけで北京を離れてしまったので、充分な調査ができなかった。再び北京へもどった

時も、詳しい調査や研究までには至らなかった。

雍和宮は参拝者も多く、賽銭箱には紙幣がいっぱい詰まっていた。現在は五、六〇人のラマ僧がいるという。濃い藤脂色のガウンのような服を着た僧が境内を往来しているのが眼にとまる。本堂にはツォンカパ像があり、創建当時のものだという。その奥の堂には二、三〇メートルほどのたいへん大きな木造りの菩薩像がまつられている。大蔵経らしいものが堂の隅に無造作に積まれている。北京版大蔵経だという説明だったが明確では無い。

大鐘寺は覺生寺といい、寺名の通り本堂の中心に、内外にびっしり経文を鑄込んだ大鐘がぶら下げられている珍らしい寺院である。経文の多くは漢文であるが、中には梵語や西藏語のものもある。鐘は四七トンのもので、鐘の頂上には穴があいている。鐘を上から見おろすとところまで登ってコインを投げて穴にうまく入ると、その一年は幸福であるという。林先生は三枚のコインを投げられたが、コントロールよく三枚とも入った。三年続いて良いことがありますよと申し上げると笑っておられた。大鐘の経文に浄土教関係のもの

がないかと捜すと阿弥陀経が鑄られているが見つかった。外側の真後ろへかかる壁に面したところにあつて、終りの部分がわかりにくい。管理の女史がテープにおさめてある鐘の音を聞かせて下さったが、知恩院の大鈞鐘を思い起こさせる音であつた。境内には北京市内から集められた大小さまざまな鐘が所狭しと並べられている。宋代のものもあるが、多くは明代のものである。銘文の入っているものが多く、往生浄土呪のみられるものもある。なかなか庄巻である。

北京では、大正大学と佛教大学合同の第二次訪中団とも出会い、中国仏教協会のご配慮で招待の席を設けて下さり、日本でもなかなかできない貴重な交流がもたれたのも印象に残ることであつた。

太原に入り、曇鸞大師・道綽禪師・善導大師の浄土三祖ゆかりの玄中寺へ参拝した。持参の蠟燭線香を供え読経した。玄中寺についてはだいたいの研究し尽されている感が強く、新しく資料が発見されない限り進めようもない状態である。ただ曇鸞大師の墓については、玄中寺から七、八〇キロ離れた現在の交城県の西にあたる文谷村にあつたという。玄中寺の分院があり、革命後の初代住職の象離



太原天龍山石窟

法師が出かけた時には何もなかったというこ
とである。
玄中寺においては、仏教界の日中友好の育
ての親として中国仏教協会の方がたが敬意を
払っておられ、この二月二十日に亡くなられ
た菅原惠慶師の死を悼む法要の録音テープを
聞かせていただいた。中国の僧たちが一心に
菅原師の冥福を祈っている様子が伝わってき
て感慨無量である。中国仏教界への菅原師の
影響の深さが感じとれる。

太原在住中に、双林寺という珍らしい寺へ
案内していただいた。ここには直接浄土教関
係の資料はないが、泥像に着色された約二、
〇〇〇体の大小の仏像が所狭しと並べられて
いる。釈尊のご生涯など物語風になっている
ものもある。太原における浄土教関係の寺院
については、考古研究所の柴沢俊先生から教
えを受けた。

西安へは三月十四日に入つた。この日は新

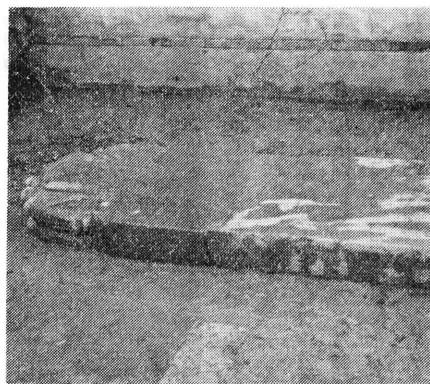
曆の善導大師のご命日にあたる。すぐにも善導大師ゆかりの香積寺に参拝しなかったが夜行列車で着いたばかりで、日程や手続きの上で実現には至らなかった。香積寺の崇靈塔に思いを寄せて善導大師を偲んだことであつた。大師に関する調査研究のために西安を訪問したのが、ご命日にあたるというのも、何か因縁の浅くないものがあるのだろう。佛教大学では卒業式が行なわれている日でもあり、思いを日本にも馳せたことであつた。

西安へ寄せていた期待の一つに、世界の文化が集まっていた唐の長安の雰囲気味わうということがあり、善導大師が教化された町の様子に触れるということであつた。しかしその期待は見事にはずされた。というより認識不足を思い知らされた。千年以上も経過している町がそのまま残っているとは考えてもみないが、せめてその一部なりともその雰囲気に触れることくらいはできるであろうと思つてた。それは千年以上も経過している日本の京都の町は、現在もよく昔の姿が保存されているので、歴史を大事にする国であるから、少しは残っているのではないかと期待を寄せていたからである。表面に現われたものはほんの申し分け程度にしか残っていない。

唐長安城坊の道ほとんど残っていない。したがって善導大師居住寺院の調査も容易にできるものではなかった。唐長安城坊の発掘もまだ手をつけられて日が浅いようであり、実際に発掘調査研究の完了しているものは数箇所にしかならない。城坊の全貌が明らかになるのはまだかなり未来のことのように思われる。

現存する明代の城壁外の町も次第に整備されて、賑やかになつてきているが、少し離れると田畑が広がっている。唐長安城の外廓を回つていただいたが、伝えられる昔の姿を見ることができない。善導大師以外の浄土教者の居住した寺院跡へも訪ねたが、ほとんどが田畑となつており、あるいは道路や別の建物に変わつてしまつていて、だいたいの場所しかわからない状態である。しかし昔そこに存在したという場所へ行くことができただけでも、何か特別な感慨があるのは、千年の歲月をこえて、浄土教祖師たちの語りかけがあるからかもしれない。

善導大師関係の寺院の調査研究が西安での主な課題であるが、長安城内の寺院のほかに、大師が師道綽禪師の没後に訪れて修行したという終南山悟真寺や、崇靈塔のある香積



長安城外 湖村小学校内の温国寺碑

寺、さらに長安城外の温国寺（實際寺）などについての調査ができた。ただ悟真寺については現地の訪問が許されなかった。しかし陝西省図書館のご好意により『藍田県志』などの資料で文献上の調査をすることはできた。それによると悟真寺は、今まで知られていた場所と異なる方角にあるようである。終南山は特定の山を指すのではなく、終南山系ということであり、興教寺のまだ東の方にある王順山という山にあることがわかった。しかも悟真寺は王順山にある上悟真寺と、山の下にある下悟真寺の二つに分かれている。ここは景勝の地で、古来より文人たちがしばしば訪

れて詩などを詠んでおり、近くの水陸庵のことについても多少のことがわかった。また善導大師の遺跡として、ほとんどの人が訪れている香積寺についても、革命前の伽藍配置などについても復元することができた。それは以前の様子を知っている方がおられたからである。確実な資料の裏づけなど、不十分な面はあるが、一往の復元ができた。香積寺を訪れた時、三人の老婆がかけつけてきて、われわれを見つけていきなり「オミトフ」といって道端に土下座をして五体投地の礼拝をし始めたのには驚いた。このあたりにはこういう篤信者が残っている。

香積寺から車で十分ほど走ったところにある湖村小学校は昔の温国寺であり、所在の解らなかった「重修温国寺碑」を発見した。碑は表を上倒れ、中ほどで二つに割れている。小学生の遊び場になっているのか、中ほどがすり減って字が読みとりにくい。林先生が読んで下書き写しとった。善導大師居住寺院を解明する資料の一つになるであろう。校長先生も出てこれられ、説明を受けたのを契機に碑の保存がたをお願いした。なお、西安滞在中に史学科の賀賀沢保規先生に出会ったのも印象に残っていることの一つである。

洛陽は、西安での日程を延長したため、当初より短くなった。洛陽ではやはり龍門が圧巻である。有名であるだけに研究も多く、ほとんど尽くされている感があるほどである。それでも、とくに龍門にみられる浄土信仰を中心に調査した。見にくい銘文を見ながら、いちいち書き写している時間もないので、夢中になってフラッシュをたたきながら写真を撮っていると、「光って撮りにくいでしょう」と声をかけた方があった。日本語で話しかけられたので思わず返ってみると、大きなカメラを首から下げた色白のスマートな紳士が立っておられた。彫刻にあまりに近づいて興味深げに写真を撮っているのを訝しく思われたのであろうか。この方は成城大学の鄧建吾先生であった。仏教美術の専門家で、とくに敦煌には毎年出かけられている。一般の人びとのためにも敦煌講座を開いておられる。洛陽には外人専用のホテルは一軒しかなく、この日の夕食時に会ったが、一般の人びとを引率されていた。石窟寺院巡りで、敦煌・龍門などを回っておられる。しばらく仏教美術についてのご意見を窺った。鄧先生は帰国されてすぐに敦煌展を開催されている。準備は早くからされていたのであろう

が、私など何一つまとまったことができない間に、大事業をしておられる。東京・大阪展に続く京都展の初日に会わせていただくことができ、久しぶりのご挨拶をした。

ところが、人に出会う時というのは重なるのか、鄧先生のあとで東京芸術大学の平山郁夫画伯に出会った。鄧先生も平山先生が来ておられるはずだといっておられたが、この広い中国で二人の先生に遇えるとは思ってもみなかったことである。何か量り知れない縁の大きな力が働いているとしか言いようのないことである。狭い日本でもなかなか困難であるのによほどのご縁である。二、三年前に佛教大学の記念講演においていただいているし、浄土宗でも宗祖法然上人と善導大師の二祖対面の大きな絵を画いていただいている。大学や浄土宗で多大なお世話になっている方である。芸大の方がたをおつれになり、スケッチ旅行をしておられるという。日本画でシルクロードを画かれるなど、あまりにも知られた画家である。

龍門石窟でもっとも注目されるのは、善導大師が勅命を受けて造られたという第十九窟奉先寺の石窟である。正面の弥勒仏の台座にはその銘が刻まれているというので注視する

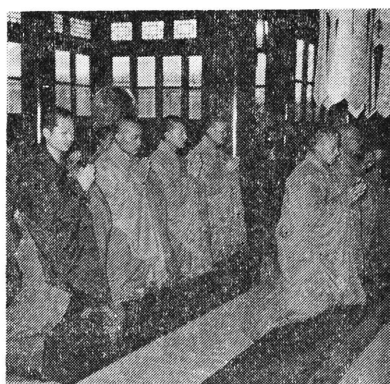
と、その部分はセメントで塗りつぶされており、その部分がセメントで塗りつぶされており、それがうまくくっついて落ちないでいると幸福になれるという迷信のようなことが盛んである。それを実際にやっている姿を各地でみかけた。このようなことは仏教には関わりのないことで、これを指して仏教は迷信だといわれているとすれば大きな誤解と言わざるを得ない。東窟へも回って見たが、ここにはほとんど残っていない。

洛陽から車で三時間ほどのところに鞏県の石窟寺がある。最近とくに注目されてきており、日本でも写真集が出版された。ここは龍門に比べると小規模であるが、仏像は龍門よりはるかによく保存されている。これも太原の天龍山と同様に、将来観光地として開発する計画があるようである。龍門で出会った鄧建吾先生も来ておられ、早や奮戦の真最中であつた。われわれもそれに続いた。石窟寺にも龍門と同様に小さな龕がいくつも彫られ、親の供養のためなどという銘が彫られた浄土信仰のみられるものがある。時間がないのでここもできるだけ克明に写真を撮ることにした。洛陽の日程が短くなったので、調査も充分にできず、後ろ髪を引かれる思いで北京

へもどった。

北京では、北京図書館所蔵の金刻大藏經を帰国間際になって拝見する機会が与えられた。この日にやっと善本部閲覧室に入ることができた。一〇数名も坐れば座席がないほど狭いところで、数名の研究者が閲覧をしておられた。すでに連絡がつけられていたように、金刻大藏經の一卷が白い布の上に広げられていた。すぐに拝見したが、非常に保存の良い『大般涅槃經』第三十二巻であつた。卷子本で、はじめに説法図があつて、その右肩に「趙越界廣勝寺」とある。一帖二行、一行一四文字で二九帖あつた。天地は二七・八センチであるが、大きさはまちまちであるという。さらに一巻の金刻大藏經を持ってきて下さつた。雨か何かで水でぬれたらしく、半分は色が変わっていて開けることができない状態である。

さらに北京では中国仏学院の勤行にも参加させていただいた。また趙樸初先生のご招待の宴を開いて下さるなど、帰国を控えてあわただしくなってきた。趙先生は、われわれが西安滞在中に日本を訪問され各地を回られた。佛教大学では名誉博士の学位をもらわれたということ、三月二十日付「人民日報」



北京・中国仏学院勤行風景

に報ぜられていた。先生は日本へは二年ぶりで十一回目ということで旧友も多い。病気がちでしかも帰国後の日程のご多忙の中をご招待いただき申し分けのない限りである。先生は過去三十年をふりかえって二時間ほど話をされた。今回の多方面へのご配慮に対するお礼を述べてお別れした。

四十五日間、回ってきたことのすべての手配を個人でしなければならぬとすればたいへんなことであり、交流の上で成り立っていることを知らしめられた。両協会ならびにご関係の各位のご配慮に厚くお礼を申し上げます。ご執筆させていただきます。

(ふくはら りゅうぜん 文学部助教授)